

綴プロジェクト作品 群鶴図屏風(ぐんかくずびょうぶ) 尾形光琳筆 寄贈先 東京都美術館 原本所蔵 フリーア美術館

Facsimiles of works in the collection of the Freer Gallery of Art, Smithsonian Institution, Washington, DC. Purchase, F1956.20, F1956.21

綴プロジェクト作品「群鶴図屏風」



文化財のもつ力が、
立場や世代を超えた対話をうながし、
新たなコミュニケーションを生む。

左隻・右隻あわせて十九羽の鶴がリズムカルに配された「群鶴図屏風」。アメリカ・フリーア美術館所蔵のこの作品の高精細複製品が東京都美術館に寄贈されたのは、二〇一二年五月。以後、東京都美術館と東京藝術大学が連携し、アートを介したコミュニティづくりを目指す「とびらプロジェクト」で活用されている。

一般公募で選ばれた「とびラー」と呼ばれる人々が、学芸員や大学教員とともに参加型のプログラムを立案、実行する。その一環として、昨年九月、子供たちを対象にした「放課後の美術館」で、「群鶴図屏風」の高精細複製品を活用したワークショップが行われた。その内容はなかなかユニークだ。屏風を見た後で二組に分かれ、一組は隣の上野動物園で実物の鶴を

見学、もう一組は東京国立博物館で文化財を鑑賞。その後、全員で語り合う。東京藝術大学特任助教の伊藤達矢氏は「アートを媒介に自分の世界を広げ、それを他者とシェアする。そうした体験ができる場を作りたいのです」と話す。



先達が残した偉大な芸術には、人と人との対話をうながす力がある。東京都美術館学芸員の稲庭彩和子氏は「こうした活動ができるのは文化財が大切に伝えられてきたからこそ。この屏風も、文化財を守るための、脈々とした人々の営みの上にあるものだ」と理解しています」と話す。文化財のもつ力が、教える・教えられるという関係を超えた、新しいコミュニケーションを生む。そんな時代が始まっている。

文・ノンフィクション作家 梯久美子(かけはしくみこ)

美と対面する感動を、ひとりでも多くの人に。

京都文化協会とキャノンの「綴プロジェクト(正式名称:文化財未来継承プロジェクト)」によって再現された群鶴図屏風は、東京都美術館に寄贈され、ワークショップなどで活用されています。キャノンの最新デジタル技術と京都伝統工芸の手技を融合して、文化財の高精細複製品を制作。オリジナルは大切に保存しつつ、綴プロジェクト作品を一般公開することで、日本の文化・芸術に触れる機会をより多くの人に提供しています。綴プロジェクトと高精細複製品の詳細は、公式サイト canon.jp/tsuzuri でご確認ください。

綴
綴
TSUZURI

文化財未来継承プロジェクト

Canon

make it possible with canon